

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 14 日現在

機関番号：34534

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25463658

研究課題名(和文) OSCEを使った保健指導教育に関して教員が身につける技法開発

研究課題名(英文) Technical development developed by teachers concerning health guidance education using OSCE

研究代表者

森山 浩司 (MORIYAMA, Kouji)

姫路大学・看護学部・教授

研究者番号：60364171

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：RCTによる保健指導(電話相談)を行い、模擬患者役においては、一定の状況設定のもと実施を行い、指導者が困るような質問の設定において特に対応力の差がみられ、このことは振り返りの項目において「自己の態度、マナー、言葉遣い、声のトーン、癖などが特に対応困難な状況下に現れることが示唆された。

また、情動領域の育成は単に理論の理解では難しく、体験学習を通しての気づきとなることも今回の研究から伺えた。「保健師国家試験への導入を視野に入れた取り組み」については、(平成26年)の出題基準に取り入れられる紙面上での想定を視野に調査を行い、実践レベルでの解釈・問題解決型を想定した問題について作成することができた。

研究成果の概要(英文)：For the simulated patient role, implementation was carried out under a certain situation setting, and differences in responsiveness were particularly noticeable in the setting of question that the leader was in trouble by RCT Health guidance (telephone consultation). In the item of retrospect, I suggested that "self attitude, manners, words, voice tones, habits etc. appear under circumstances where it is particularly difficult to deal with. I was able to create a problem that assumed interpretation / problem solving type at practical level.

研究分野：公衆衛生看護学

キーワード：保健指導 OSCE 保健師

1. 研究開始当初の背景

保健指導に関して、特にフィードバック部分に関して指導者(教員)の技法により、学習効果が変わってくることや OSCE に関しての知識・技術について指導者(教員)の習得状況により差が生じる点に着眼した。このことより指導者(教員)が統一した質の高い教育技法習得することが学習者にとって有益だと考えた。

2. 研究の目的

保健師学生に高度・多様な保健師教育を提供できるように、OSCE を使った保健指導教育に関して教員(保健師教育指導者)が身につける必要性が高い技法の開発をすることにある。

3. 研究の方法

OSCE ガイドラインに沿った保健指導・電話相談を実施し、学習者の課題達成状況と教員の指導記録をまとめプロセスレコードの作成を行い、学習者の課題達成度によって、グループにわけてそれぞれ効果的な指導・フォロー状況をまとめる。

また保健師国家試験を視野に入れた OSCE 導入に向けた示唆を得ること。

4. 研究成果

看護技術教育における技術修得過程について薄井らは、「知る段階」「身につける段階」「使う段階」があるとし、繰り返し練習しなければ、その人に応用して「使う段階」までには至らないとして、反復練習の重要性を説いている。

本研究で RCT による保健指導(電話相談)を行い、模擬患者役においては、一定の状況設定のもと実施を行い、指導者が困るような質問の設定において特に対応力の差がみられ、このことは振り返りの項目において「自己の態度、マナー、言葉遣い、声のトーン、癖などが特に対応困難な状況下に現れることが示唆された。

また、情動領域の育成は単に理論の理解では難しく、体験学習を通しての気づきとなることも今回の研究から伺えた。

さらに、このことは自己が実施した保健指導(電話相談)で録音によって客観的に振り返ることやその後指導が受けられる機会が重要だと思われた。

学習者が自己トレーニングとして重要なよう教員にも同様にこれらは、技術の習得に重要なプロセスを促進していると思われる。

フィードバックの利点としては、改善点を

受け入れる教員や学習者に心理的余裕があること、必要に応じて個人指導ができることが示唆されている。

逆に問題点としては、態度や表情や言葉のニュアンスなどを評価する医療面接や説明・指導系の課題では課題内容が曖昧となり、その場でフィードバックしなければ受験者はわからないとした評価者も多いことがすでに研究されている。

看護分野で「人間関係の技術は看護実践の場で自然に身につくものである」といった考えもある。しかし、コミュニケーションは習得すべき「技術」であり、臨床の場でコミュニケーション能力に優れた先輩から学べれば良いが、そうでない場合には、基本を身につけずに過ぎてしまい、自己流の技術となることが考えられる。

保健師の保健指導・電話相談においては、その危険性が十分に危惧される。

保健師は1人職場も多く、保健指導のブックボックス化によって、自己流の技術になることが推測される。保健指導・電話相談は、日常会話とは異なるコミュニケーション技術である。

保健指導・電話相談について研究成果の「普及・視覚的教材化」やまた「保健師国家試験への導入を視野に入れた取り組み」にどのように還元できるか、「地区アセスメントとの関連の中での保健指導の思考」について報告する。

「保健指導についての普及・視覚的教材化」については、音声・活字の段階で視覚的教材化においてはプライバシー・著作権の観点からも課題が残った。「保健師国家試験への導入を視野に入れた取り組み」については、

現在(平成 26 年)の出題基準に取り入れられる紙面上での想定を視野に調査を行い。実践レベルでの解釈・問題解決型を想定した問題について作成することができた。

しかし、実際に保健師国家試験に OSCE を導入すべき具体的検討案についてまでは取り組むことが出来なかった。「地区アセスメントとの関連の中での保健指導の思考」については、過去に行った地区視診の研究と関連性を持たせて保健指導に必要な技術としてどのような項目や思考があるかなどについて考察を行った。

保健師国家試験の作成した事例については、今後はブラッシュアップを図り問題の難易度やタキソノミーレベルを考えて多肢式選択問題(MCQ)の作成を行っていき、公募問題として登録を行う。

そのために本研究では、保健師国家試験のタキソノミーレベルについての教員間トレーニングや新出題基準(平成 30 年国家試験

導入)に向けた教員の習得すべきスキルアップについても関連を持たせるように心がけてきた。

教員が身に付ける技法として、教育目標分類の認知領域(知識)、精神運動領域(技能)、情動領域(態度)の3領域を考慮した教育の取り組みが特に必要であり、OSCE等の評価方法を選択できるようになることが重要であると考えられる。

研究の限界として、保健指導や電話相談などでは対象者との信頼関係の構築が求められる、或は構築の上に成り立つ信頼関係を考慮に入れる必要がある。今後はこのような信頼関係の構築も視野に入れた研究が求められる。

参考文献

薄井担子. Module方式による看護方法実習書. 現代社. 1996.

宮脇正一, 出口徹, 村上薫, 他. 説明系OSCE開始直後の評価の信頼性. 日本歯科医学教育学会雑誌. 2007;23(3):299-304.

相澤文恵, 岸光男, 熊谷敦史, 他. OSCEにおける評価の妥当性に関する検討-第1報複数評価者間の評価の一致度についての分析-. 日本歯科医学教育学会雑誌. 2003;19(1):109-118.

音琴淳一, 黒岩昭弘, 山本昭夫, 他. 試験直後にフィードバックを行わないOSCEの評価者アンケートによる評価. 日本歯科医学教育学会雑誌. 2005;21(3):299-309.

岸光男, 相澤文恵, 大平明範, 他. OSCEにおける評価の妥当性に関する検討-第2報医療面接で評価者は何を評価しているか-. 日本歯科医学教育学会雑誌. 2003;19(1):119-124.

阿部恵子, 鈴木富雄, 藤崎和彦, 他. 模擬患者(SP)の現状及び満足感と負担感-全国意識調査第一報-. 医学教育. 2007;38(5):301-307.

藤崎和彦, 尾関俊紀. わが国での模擬患者(SP)活動の現状. 医学教育. 1999;30(2):71-76.

中村真澄. コミュニケーション・スキルの教育実践の試み-シミュレーション(模擬患者=SP)を導入して-. 慶応義塾看護短期大学紀要. 1997;7:57-69.

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

森山浩司, 長谷川幹子, 今村恭子, 地区視診における具体的観察項目の構築に向けて、査読有、姫路大学看護学部紀要第8号、p1-6、2016.

森山浩司, 北原信子, 長谷川幹子, 石田富紀子 OSCEを用いた保健指導の展望、査読有、近大姫路大学看護学部紀要、第6号、p1-9、2014.

[学会発表](計0件)

[図書](計0件)

[産業財産権]

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織
(1) 研究代表者
森山浩司 (MORIYAMA, Koji)
姫路大学・看護学部・教授

研究者番号：60364171

(2)研究分担者

長谷川幹子 (HASEGAWA, Mikiko)

太成学院大学・看護学部・講師

研究者番号：90583930

(平成26年度まで)

今村恭子 (IMAMURA, Kyoko)

園田学園女子大学・健康科学部・講師

研究者番号：10530181

(3)連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者

()